

映らずともここだけわり抜いて

全国上映中「渾身 KON—SHIN」に出演する甲本雅裕の話をたっぷり聞けたのは、甲本から提案があったからだ。テレビの取材でほんの十数分、甲本と話した。映画「渾身」に触れたのはわずかな時間。数日後、所属事務所から電話があった。願ってもないことだった。

「渾身」を評価してくれていることが分かった、と甲本は言う。だからこそどう伝えるか、書きあぐねているのではないかと。「僕はできたものを見た瞬間に、すごい作品ができたと思ったんです。でも撮影中から、宣伝に困るだろうとも思っていた(笑い)」

島根県隠岐島が舞台。神



土俵下で取組を待つ青柳(前列右から2人目)と、彼をサポートする甲本(同3人目)

隠岐島の古典相撲通じ愛描く「渾身 KON—SHIN」

事、古典相撲を通して現代の愛を描いた、美しく、激しいこの映画を、観客に見てもらおうとここまでが映画作り。とすれば、この作品のどこを捉えて宣伝し、足を運んでもらえるかが映画成功の最終コーナーになる。

近年の日本映画の中で、小津、黒澤作品とも比べられる数少ない映画。だが素材は地味だし、ご当地映画と勘違いされる危険さえある。興行的に心配な面があることは否めない。

中井貴一主演「RAILWAYS」(10年)など、甲本は錦織良成監督の映画への出演は5作目。「渾身」では主演、青柳翔の相撲をサポートする島の先輩を演じる。相撲にまつわる家族の話が語られていくなかで、いざ本番の取組直前、甲本のエピソードが入る。

錦織は控えめな演出をする監督だ。「それはやめますか。なしにしましょう」。現場で口にする言葉には意味

がある。せっかく見る人に伝わっているものが、一歩踏み込んだ動きや言葉が加わることであらさまになる。それを錦織監督は嫌う。

甲本が担うのは、青柳の

家族を支える島の女性(財前直見)にプロポーズするシーン。唐突にも思える挿話だが、どうすれば作品の中で一つになれるか。フルスイングもいけないが、さらりと流れてしまっただけ意味がない。甲本は画面の隅に映る時でも、全編通じてある芝居することに決めた。すべてプロポーズにたどり着くため。

一緒に生きている人間なら、周りもその人の唐突な行動の「なぜ」が納得できる。だが2時間の映画の中で首肯させるのは、脚本に加え俳優の力量が必要だ。

主人公の人生は劇的だ。それは映画の中だから辛うじて見ること。映らない人がはみな劇的に生きている。「渾身」は相撲を取る人だけの渾身ではない。

伊藤歩、宮崎美子、中村嘉律雄、高橋長英……。どの役者も細部までこだわり抜いた仕事を見せる。例えば黒澤時代劇の常連、隆大介は、存在感という演技で画面を引き締め続ける。隆のせりふはたった一言なのにそれができる。

渾身の演技をする役者ばかりをそろえてメジャー作品を撮る。当たり前のようにだが、今の日本映画界では不可能に近い。錦織監督はこういう映画を毎年撮ると言う。

【若狭殺】

©2012「渾身」製作委員会